

---

# ネギと手品と四暗刻

ザムディン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギと手品と四暗刻

### 【Nコード】

N5836L

### 【作者名】

ザムディン

### 【あらすじ】

教習所での普通免許合宿20日間。

出会い、別れ、ネギ、手品、四暗刻…

## 1 旅立ち

2010年3月17日、水曜日。

わたしはどでかいスニーカーを引きずって歩いていた。

始まりは、一年前。

就職先に面接に行った際、「免許は取るんだよね？」と当たり前のように聞かれたが、わたしは内心「は？」と思った。

資格については高校時代、それこそ洗脳に近い教育の末散々取らされた訳だが、まさかプログラマーで面接を受けに来て自動車免許について聞かれるとは思っていなかったのだ。

わたしにとって移動手段とは「自転車」なわけで、何が悲しくてわざわざガソリンまで吸わせて死に行かなきゃならないのか、と。

結局、喧嘩を売る訳にも行かず、その場凌ぎで適当に言った「はい。卒業直後に取得したいと思っています。」の一言が波乱への扉だった。

現実逃避しているうちに気がついたら卒業間近の2月になっていた。もちろん、その間段取りなど一切取っていない。

正直どこの教習所でも良かったので、手続きは母に一任していた。今更、釜茹でだろうと針山だろうと地獄に行くのは代わりはしない。

しかし、任せたはずの母からは「あんたはどこの合宿所がいいの？」と返事が返ってきた。

どこでもいいから任せたのに、どこがいいの、とはこれいかに。

とりあえず「料金格安」をテーマに検索した結果（そもそも通いやりも合宿の方が安上がりなので、最初から合宿前提だった。そのくせ今更、どこがいいの？とは納得いかない。）「那須合宿センター」に決定した。

日程は3月15日から30日。入社式は4月1日なので、31日に免許センターに行つて、という綱渡りスケジュールだ。

もちろん、教習が伸びたりとか、免許試験に落ちたら、ということは考慮していない。考えたくも無かった。

しかし、インターネットでは（空きあり）になっていたにもかかわらず、電話してみると15日は無理で、17日入学になってしまう、という。もちろん卒業も繰り下がり、31日になる。

なぜ入学が2日遅れるのに卒業は1日しか遅れないのかと疑問だったがそれはおいといて、別に入社に間に合わずともしったこっちゃなかった。釜茹でから針山に行くのが一日ずれるだけの話だ。

会社に電話し、1日だけ入社が遅れる旨を伝え、17日の入学が決定した。地獄行きの日程が決まったわたしは、再び現実逃避の日常に戻った。

自由登校を経て、卒業。また遊び狂い、目が覚めたらその日の朝になつていた。

早朝、スーツケースと旅行バッグを持ち、母と家を出た。

バスで宇都宮駅へ、そこから新幹線一駅で那須着というあっけない旅だが、文字通りお荷物のお陰で一気に苦行と化した。

ひいひい言いながら売店でおにぎりを買ってからやっとホームにたどり着くと、母は「どうせ10分であっちに着くからドアの前で待ってな。」と言う。冗談じゃない。

新幹線が到着し、乗り込む。乗って、車両に入ってドアに一番近い席に座ると、母がこっちを見ながら窓を叩いてくる。

別に座ったっていいじゃねえかよ、と思ってるうちに発車。

（ああ、やっと座って落ち着ける…）

深いため息を吐くと、母からメールが届く。

「そこは指定席だよ！」（本文一行目）

那須に着くまでの10分間、わたしは通路に陣取り、トイレに入る人を眺める便所妖怪と化していた。

## 2 入学

那須駅に着くと、集合場所となっている西口階段下には、同年代のスーツケースを持った好青年達がちらほらと集まっていた。皆、お互いに話しかけるわけでもなく、用も無いのに携帯を取り出したりする微妙な雰囲気だった。

集合時間3分前になっても迎えのバスが来ず、「変だなあ」という雰囲気が辺りに漂い始めたので、わたしも「この場所であってますよねえ？」とか話しかけようかと思ったが、何か負けた気がするので止めた。

第一、それで野木温泉行きの観光客に話しかようものなら、立ち直れる気がしない。

集合時間1分前にバスが到着し、乗り込むが、思ったよりも連れ同士の入学者は少なかった。

教習所への道中、皆押し黙ってこれまた妙な雰囲気だったが、わたしは遠くの看板をしきりに見ていた。

うわの空だったのではなく、買ったばかりでメガネに慣れていなかった為、視力が心配だったからだ。

地獄行きのバスとはいえ、着いて早々

「視力が足りません。本当にありがとうございます。」  
ではあまりにもお粗末だ。

そのうち、広い通りに出たが、事前に送られてきた資料にあった近辺地図に載っていた店をいくつか見つけた。

マクドナルド、セブンイレブン、ゲームセンター、カワチ、そしてモスバーガー。その隣に細い道。ウインカーが点灯する。曲がる。進入する。あ、やばい。着いた。

もう、気分はもっぱら「強制収容」だった。絶望感の塊になりかけたわたしだったが、ふと目を向けると、なんと敷地内にゲームセンターがあった。

しかも、「麻雀格闘倶楽部」「クイズマジックアカデミー」などと、妙に期待感を持たせるカラフルなポップが貼られている。僅かだが、後のお楽しみが出来た。

バスを降りた入学生達は、二階の第二教室に通された。

長机には名札と書類が置かれている。記入する箇所、ハンコを押す箇所等の説明を受け、記入中に少人数ずつ部屋の後ろで視力検査を受ける。

わたしは机の下で母にメールを打ち、書類を記入した。住民票等をカバンから取り出していると、すぐに母から返事が来た。

「入れてない！」

案の定、ハンコ忘れやがった。

エンコ（拇印）で勘弁してもらえたが、どうしてもよすぎて住民票その他をすべて母にまかせっきりで、確認もせずにここに来た自分を、

激しく悔いた。

資料の必要物欄の横にわざわざ

？住民票

？

？保険証

？

？免許証

？

？ハンコ

？

と マークを書いた跡があっても、決して母を信用してはならないと、息子の自分が分かっていずに誰が分かり得るというのか。

書類を書いた後は、部屋の鍵を渡され荷物を置きに行った。

昼を挟んで入学式になるのだが、同じ部屋の二人は簡単に挨拶を交わした後すぐに食堂に行ってしまった。

毎食分の金額も合宿料金に含まれているので食べない理由は無いのだが、昼用のおにぎりが腐るので新しい自分の寢床でモソモソと食った。

入学式は簡単な偉い人の講話と、施設や日程の説明で終わった。

どうやら、説明を日本語に直すと、今日は午後からさっそく学科が2時限、技能が2時限あり、技能の最初1時限目は、模擬運転機械を使った模擬講習ということらしい。



ありがたい話だが、正直、模擬運転は3時限は欲しかった。  
どうやら技能2時限目の指導員は、念仏でも唱えておいたほうがよ  
さそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5836/>

---

ネギと手品と四暗刻

2010年10月12日02時21分発行